



平安だより

世田谷平安教会付属平安幼稚園
2017年 10月号

「人生の浮き沈み」

牧師・園長 長村亮介

ルーシー 「ときどき気がめいるの」

チャーリー・ブラウン

「まあ、人生には浮き沈みがつき物だよ、ルーシー、だって…」

ルーシー 「でも、どうして？ どうして必要なのよ？

私の人生がいつも《浮き》ではどうしていけないの？ いつも《浮き》がほしいのに。 どうして手に入らないのよ？」

ルーシー 「どうしてひとつの《浮き》から次の《浮き》へ移れないのよ？ どうしてひとつの《浮き》から次の《浮き》へ移れないのよ？」

ルーシー 「《沈み》なんかほしくない！ 私は《浮き》と次の《浮き》がほしいの！」

チャーリー・ブラウン

「耐えられない…」

新しく生まれ変わり、永続的で満ち足りた人生を送るためには、誰もが《逆境を切り抜け》なければならぬということとは、《つらいこと》であり、あまり喜ばしい話ではありません。だから福音、すなわち《喜ばしい話》は、すでに《従順でつましい》人間、すなわち《謙虚で悔い改め》た人間にとっては喜ばしい話ですが、そうでない者にとっては決して喜ばしい話ではないのです。したがって、福音つまりキリスト教の教えは、つねに《聞く耳をもった》者、《苦しみを味わい重荷を負う者》にむけて語られます。

「苦しみを味わい重荷を負う者は、みな私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」

(マタイによる福音書 一一章二八節)

しかし、完全な《しあわせ》に到達するためには、人生で《逆境》を経験しなければいけないということ、とくに完全な逆境を経験することが不可欠であるということとは、そこまでの挫折を経験していなかったり経験したくない者にとっては、ひどく腹立たしいことです。

(『スヌーピーたちの聖書のはなし』 ロバート L. ショート著)

「スヌーピー」で知られるアメリカの漫画家シュルツの『ピーナッツ』は、中学生くらいの時によく読んでいました。しかし、上にご紹介したような作品は、当時はおよそ理解することができていなかったのではないかと思います。なぜなら、チャーリー・ブラウンがルーシーの何に「耐えられない」と言っているのかなどは、かなり大人の台詞だからです。チャーリー・ブラウンが「耐えられない」と言っているのは、恐らくルーシーが人生の苦しみを知らないが故の、その《浮き浮き》願望にある、人生に対する傲慢さなのではないかと思えます。

また、その前の「人生には浮き沈みがつき物だよ。ルーシー、だって…」にどのような台詞が続くのかも、考えさせられます。人生の「苦しみ」については、若い時から分かっていたつもりでしたが、分かっているのと経験するのでは次元が違ふようです。昔の自分だったら、「だって…」の後に、どんな台詞を読んでいたのでしょうか。そして今はどんな台詞が入って、更にもう少し時を経たら、また違う台詞を自分はここに読み取るように、きつとなるのではないかと思えます。別に正解があるわけではないと思いますが、今の私なら「だって…、逆境があつて初めて、それが生きるといふことなんだと思うよ。」と言いたいです。

さて、子どもたちはどんな答えになるのでしょうか。お友だちとはときどき、チャーリー・ブラウンよりはるかに大人だったりして、わたしたちを驚かせることがあります。いつか聞いてみたいと思います。